男女共同参画社会の実現に向けて

らぷらす

編集・発行／世田谷区生活文化部　人権・男女共同参画担当課
2014年7月発行　世田谷区広報印刷物登録番号／第1172号
〒154-8504 世田谷区世田谷4-21-27 TEL5432-2259 FAX5432-3005
制作・印刷／(株)ドゥ・アーバン

NO.69
2014.7

巻頭インタビュー

「これが私」と思えたとき自然体になれた

3 若者の結婚観を探る
6 一人ひとりを大切にするやさしい社会へ「シングルマザー」
7 ”らぷらす“を紹介します！

この情報紙の表紙には、目の不自由な方などへの情報提供に役立てられている音声コードを印刷しています。

「音声コード」は紙に掲載された印刷情報をデジタル情報に変えたシンボルで、約2cm角の中に日本語（漢字かな交じり）で約800文字の情報を記録することができます。専用の活字文書読み上げ装置を使用して音声で内容を聞き取ることができます。
「音声コード」の横には、視覚障害の方が触覚によりコードの位置を把握できるよう、切り欠きを入れます。
この情報紙らぷらす69号に切り欠きを入れたものをご希望の方に配布しています。
詳しくは人権・男女共同参画担当課までお問い合わせください。

巻頭インタビュー

「これが私」と思えたとき自然体になれた

女優・声優・歌手等、10代の頃から現在まで多くの場で活躍している戸田恵子さんにインタビュー。これまでの活動や世田谷との縁など、戸田さんの自分らしさが窺えるお話をしていただきました。

芸能活動・現在まで

児童劇団在籍中にスカウトされ、名古屋から上京して歌手になりました。でも、なかなか成功できず、自分を一旦リセットしようと思っていた19歳の頃、劇団に入って舞台女優の道を歩み始めました。当時、舞台のことはよく知りませんでしたが、お稽古を積み重ねて全員で一つのものを着実に創り上げていくところ、実力主義で堅実なところに惹かれました。それまでは機会があったから東京に出てきたという感じだったのに対し、この時は自分から「やってみよう」と決断しました。縁あって声優の仕事にも出会い、今日まで本当に色々な活動をさせていただいています。

テレビも映画も舞台も「活きた」セリフを喋ってお芝居をするという点は共通していますが、どれも特有のルールがあります。その違いが難しい部分ではあるのですけれども、同時にそれぞれの仕事の楽しさにつながっているとも感じます。どんな経験も無駄にはならないのです。

実は東京に来て最初に住んだのが世田谷で、当時は松陰神社の辺りにいました。今も世田谷区民です。私が上京してほどなく母もこちらに移り住み、どの舞台も欠かさず観にきて、テレビ出演やアンパンマンの放映もチェックしていました。感想はいつも「綺麗だったね」「面白かったよ」といったシンプルなもので、言葉は多くなくても、私をそっと支えてくれました。介護・看護が必要になった晩年はとにかく大変でしたが、忙しい中でも10分あれば家に帰るような生活をして、最後まで一緒に暮らしました。一番応援してくれた人であるのは間違いありません。母との日々も含め、世田谷はたくさんの思い出が詰まっている大好きな街です。

戸田　恵子　（keiko toda）

愛知県出身。NHK名古屋放送児童劇団を経て、74年「あゆ朱美」の芸名で歌手デビュー。77年、野沢那智主宰の劇団「薔薇座」に入団し、89年の退団まで看板女優として活躍。以後女優として、三谷幸喜作・演出の舞台の常連として舞台で活躍するほか、数多くのテレビドラマ、映画に出演。97年『ラヂオの時間』で日本アカデミー賞優秀助演女優賞を受賞、2006年『歌わせたい男たち』で第13回読売演劇大賞最優秀女優賞を受賞。また声優としても『それいけ!アンパンマン』のアンパンマン役、洋画吹替で活躍。近年、アルバム「ROUTE55」を出し歌手活動にも力を入れている。4月からは、NHK「スタジオパークからこんにちは」の木曜日の司会進行を務める。

著書に『ちゃきちゃき』（学陽書房）、今年5月には、故郷・名古屋の“食”体験と記憶を綴ったグルメエッセイ＆ガイド『おいし なつかし なごやのおはなし～戸田恵子の“なごやめし”入門』（ぴあ（株））が発刊。

◀戸田さんの公演を観に来てくれた「ラブジャンクス」の子どもたちと

一期一会に魅せられて

趣味ではお芝居に限らずコンサートや落語といった生のパフォーマンスを観るのを楽しんでいて、機会があるたびに出かけています。生身の人間が鍛錬を重ねて創り上げたものを自分の目で同じ時間に同じ空間で観るのは、まさに一期一会で、その日しか起こりえないことを体験する贅沢な時間だと思います。同じ作品でも席が違えば雰囲気は違うし、隣に誰が座るかによっても違う。想像を絶する技を前に「これが本当に生身の人間ができることなの?」と驚いたり、お芝居で感動して「私のお芝居でも感動してくれる人がいるかもしれない、頑張らないと」と自分を奮い立たせながら、本当に一回きりの機会を堪能しています。

相当な訓練をして、ある一線を超えた人間の素晴らしさには心を動かされますし、他の人のいいものを観るとやる気が出ます。観ること自体が本当に楽しいし、好きなんですよ。生のパフォーマンスの素晴らしさには、いつも触れていたいです。

与えられた条件の中でベストを尽くす

今、自分で展開しているアパレルブランドの収益で、ダウン症の子どもたちのダンススクール「ラブジャンクス」を支援しています。キンダー・フィルム・フェスティバルという子どもの映画祭のチェアマンを務めるといったボランティアも行っています。限られた時間の中でも、それらをもう少し充実させていきたいという思いがあります。

ダウン症の子どもたちには、ダンスの発表会に使うグッズなどを作ったり、クリスマスにお菓子などを贈るといった形の応援をしています。実際に会いに行くことも多く、ダンスの発表会では、応援しているはずの自分の方が励まされます。みんな全力で踊って、体中から「楽しい」という気持ちがあふれているんです。彼らにもパフォーマンスをすることの楽しさを知っていてほしいし、本当は多くの人にもっと彼らのことを知ってほしいです。彼らがこれからどう生きていくかということは、親や親戚だけでなく、地域や社会も考えなくてはいけないんですよね。

やなせたかし先生は、常々「今できる範囲のことでベストを尽くす」のだとおっしゃり、ご自身でそれを体現していらっしゃいました。特にここ数年は、体調が整わない中でのベストの尽くし方があるということを、身をもって見せてくださっていたように思います。

自分の体と折り合いをつけながら、その中でできること。この私に今与えられている、私の条件と見合うところでできることとは「今その現場に集中すること」なんです。数多くある現場の中で、一つ一つに集中する。先生の教えを、今はそんな風に生かしていければと考えています。

軸を据えて生きる

振り返ってみると、若い頃はちゃんと人と向き合えていなかった時期があった気がします。体裁としては上手にふるまっていたけれど、心から何かと向き合っていたのかと考えると疑問に思えて。でも、ようやく自分を少し信じてもいいのかなという気持ちになれたかもしれません。様々な活動ができるのは協力してくれる人がいてこそですが、私の軸がぶれていたら、きっとこれほど一緒にやってはくれないでしょう。

これまでの活動は、たまたま色々なことで声をかけていただいて、それがうまく続いているという感じですね。そういった幸せもあって、自然体に近づいたように感じます。コラボレーションやジョイントライブなど、自分では思ってもみなかった企画も始まって、面白くなってきていると思います。

私は、様々なお仕事をさせていただいている自分を百貨店に例えることがあります。1階が女優、2階が声優、3階が歌手とそれぞれのフロアがあるとします。例えば映画俳優として活躍している一軒の老舗を構えている人がいるなら、私はそのお店に負けないぐらい百貨店の1階を活性化させていなくてはなりません。昔は老舗をかっこいいな、羨ましいなと思っていましたが、自分も老舗と勝負できるぐらいの何かを持っていればいいのではないかと考えるようになりました。「私はこれでいいんだ、ぶれずにいくんだ」と決めた時から、「自分はこういう感じなのかな、これが私なんだな」という風に自分を収めたところがあるんですね。フロアのどれか一つがなくてもダメなのかな、と思います。

本当に周りの人に恵まれて、多くのことに取り組めています。その恩返しもしたいですし、もっともっとそれぞれの仕事のステップアップもしたいので、目標は貪欲に持っていきたいですね。